

令和4(2022)年度 学校評価総括表 伊丹市立伊丹特別支援学校

教育目標		豊かな心、たくましく生きる力					
重点目標		①児童生徒の実態把握を適切に行い、自立活動の充実や類型を意識したカリキュラムマネジメントを進める②卒業後の進路や生活を見据え、肢体不自由特別支援学校としての取組の充実と地域への発信の強化 ③安全で安心な学校づくり ④一歩進んだセンター的機能の充実 ⑤すべての教職員が学校課題を意識し教育目標の実現のため、連携協力し、「チーム伊丹特別」として学校課題に取り組む ⑥ゆとりと愛情が感じられる職場づくり					
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	総得点 総合評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	(教育課程) ○個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用し、一人ひとりに応じた指導・支援の充実を図る。 (自立活動) ○外部講師の相談を活用し、学部・学校全体で情報を共有して授業にいかす。 (教育課程) (自立活動) (研究推進)	○これまでの指導・支援の評価や実態把握を踏まえて、PDCAサイクルで個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成する。 ○相談票の書き方や過去の相談内容を参照できるようにする。 ○クラスや学部等において助言内容を確認後、職研くんを活用して閲覧を呼びかけ、学校全体で情報を共有する。 ○相談内容や児童・生徒の状況により、ビデオ会議での相談も可能であることを周知する。 ○アセスメントチェックリストの活用について、クラス研や研究全体会を通して理解を深める。 ○学部をこえた同じ指導教科グループでの教科研に取り組み、各学部の学習の情報や授業づくりの悩みを共有する。 ○見えて学ぶ公開授業を実施する。 ○クラス研の中で自分の授業について話題提供し、テーマをもとに話し合う。	○過去の評価を活かして、個別の教育支援計画や個別の指導計画の目標や手立てを検討し、設定できる。 ○適切な実態把握に基づいて指導・支援する為に外部講師の相談を活用することができる。 ○相談内容を共有し知識を広げたり、情報をお互いにかきとって実践したりすることができる。 ○アセスメントチェックリストの内容や発達項目を理解し、実態と照らし合わせチェックすることができる。 ○各教科の指導目標や、目標の解釈の仕方について知り、授業づくりに活かすことができる。 ○題材設定や支援方法について知り、自分の授業づくりに活かす。 ○自分の授業について振り返り、良い点や改善点に気づき、授業づくりのポイントを知り、自分の今後の授業づくりに活かすことができる。	141/160 A(88%)	○これまでの指導・支援の評価を踏まえて、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成することができた。 ○学部では情報共有できたが、職研くんを活用した方法では、学部を超えての共有は難しかった。 ○課題相談の中で一部、外部講師の助言がニーズに合わなかったことがあった。 ○アセスメントの協議会や研修会を通して、アセスメントの意義や活用方法については理解を深めることができた。チェックする上で必要な各発達段階の特徴を学ぶ場がなかった。 ○各教科毎に情報共有を行い、1つの単元の縦のつながりや目指す姿を整理することができた。 ○見学年制作りを行い、授業見学の取り組みを行うことができた。毎月開催を目指していたが、難しかった。 ○毎回一人を主役として年度初めに計画を立てることで、クラス内で満遍なく授業について話し合うことができた。また、毎回話し合うテーマを設けることで、授業者の悩みに寄り添って深く話し合うことができた。今後も引き続き、同じ形で計画的に取り組む必要がある。	○今後も引き続き、PDCAサイクルで書類を作成する必要がある。 ○相談者からの相談票の提出後、速やかに自治部が全体へ周知し、情報共有を徹底する。 ○上記に合わせて、職員会の連絡事項にひと月分の相談内容を掲載する。 ○講師の選定については、自治部員が講師の考え方や指導方法に関する情報を詳細に...	○講師については、学校のニーズに合った重度重複児対象の教育的意見が得られるような人を招聘する必要がある。 ○今後も教員の研修の機会を確保し、資質向上や専門性の向上に努めてほしい。
	(キャリア教育) 児童生徒の発達段階や発達課題を踏まえたキャリア教育の推進・充実を図る。 (進路)	○キャリア教育全体計画における児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を踏まえて、教育活動を展開する。 ○各関係機関と連携を深め、進路に関する制度や情報交換を丁寧に行う。 ○保護者に対して福祉合同説明会や進路説明会、見学会、進路祭り等を通して適切な情報を提供する。	○本校児童生徒の実態を適切に把握し、各関係機関と連携・協力を深めることができる。 ○毎月の進路だよりや発行やホームページの更新を随時行い、情報発信ができる。	149/175 A(85%)	○キャリア教育の資質・能力を踏まえて、各授業の活動や指導に取り組むことができた。 ○連携していくに当たり、良好な関係性を構築できている。新たに企業とのつながりもできつつあり、今後も継続していく必要がある。 ○進路だよりやホームページを利用して随時情報発信を行った。地域に向けて本校の進路指導について福祉合同説明会等で説明することができた。	○今後も引き続き、キャリア教育を意識して教育活動に取り組む必要がある。 ○移行できる場を増やしていくため、より多くの施設と連携を図っていく。 ○保護者の説明会参加率を伸ばすため、進路の重要性をもっと発信していくことが必要である。 ○進路指導について福祉合同説明会等で説明することができた。	○学校運営協議会で進路の話を開き、保護者だけでなく、先生方と一緒に考えていくことが大事だとわかり安心した。小学部の保護者にも進路指導についてもっと知ってもらう機会があれば良い。 ○定期的に進路だよりを発行しており、情報提供にしっかりと取り組んでいた。
	(小・中・高)	○小・中・高の授業を通して児童の人間関係づくりの基礎を学ばせる。 ○人とのふれ合いを通し、コミュニケーションの力や相手への思いやりを育てる。 ○日々の学習や校外学習、職場体験実習などの活動で、多くの人と関わりを持つ。	○それぞれの集団学習の中で、児童が他者と関わる力をつけられるような内容や場面を設定する。 ○学校の内外の多くの人と関わる機会を設け、生徒自身がコミュニケーション力を発揮し、相手とつながる体験をする。 ○校内で関わり、多くの人と関わり、自分の気持ちや考えを発信し、他者の考えを知る機会を多く設ける。	72/80 A(90%) 37/40 A(92%) 40/45 A(88%)	○よかよかタイムや道徳、体育等でクラスを超えた学習集団を編成し、児童同士関わり学習することができた。 ○道徳などの授業で、校内の教師と関わりたりすることができた。また、修学旅行や校外学習を行い、学校外の大人とも関わることもできた。 ○校内の職員や児童生徒とは、様々な教育活動を通して、関わることはできた。校外の人達とは、感染防止対策も有り設定が難しかった。 ○4月の「児童生徒紹介」で各子どもの概略については共通理解できる場の設定は行えた。また、学校医をはじめとした医療機関との繋がりを健診等で綿密に知り、本校の状況を伝えることができたと考えている。ただ、「児童生徒の紹介」時の実施方法については、統一性がなかったために子どもたちの配慮事項の説明にはらつきがあったように思われる。	○今後も引き続き、キャリア教育を意識して教育活動に取り組む必要がある。 ○移行できる場を増やしていくため、より多くの施設と連携を図っていく。 ○保護者の説明会参加率を伸ばすため、進路の重要性をもっと発信していくことが必要である。 ○進路指導について福祉合同説明会等で説明することができた。	○今後も子どもと新しいことに挑戦したり、子どもとの関わり時間も大切にしていきたい。 ○来年度は可能な範囲で、卒業生や外部の人と関わる機会を増やしていきたい。
豊かな心・健やかな体	安全・安心な学校づくり (校内保健) (危機管理)	(校内保健) ○児童生徒の実態に応じて、健康の保持・増進をはかると共に命を大切にすることを育てる。 (医療的ケア) ○「石橋の叩き方」を見直し、各クラス単位で運用できるようにする。 ○災害時ハンドブック作成をする。	(校内保健) ○校内における児童生徒の健康に関する情報共有、学校と医療の連携を図ることができる。 (医療的ケア) ○児童生徒の医療的ケアの情報共有を円滑に行うことができる。 ○教員・保護者に周知し、活用できるように進める。	167/190 A(88%) 164/190 A(86%)	○4月の「児童生徒紹介」で各子どもの概略については共通理解できる場の設定は行えた。また、学校医をはじめとした医療機関との繋がりを健診等で綿密に知り、本校の状況を伝えることができたと考えている。ただ、「児童生徒の紹介」時の実施方法については、統一性がなかったために子どもたちの配慮事項の説明にはらつきがあったように思われる。 ○月1回委員会を開催することで看護師も児童生徒のことを把握できた。全教員への周知や職員用ハンドブックの活用方法は今後の課題である。 ○緊急時・災害時の見えてみるブックを作成・周知できた。今後活用する場面を想定した訓練が必要である。 ○防災マニュアルに留まらず、普段の生活の中でも「自分の身を安全に守る」行動や環境設定について考えられるようになってきている。今後も継続して取り組んでいきたい。 ○安全計画提案時より、運動場上や自宅の安全対策や備品について考える機会を作った。少しずつではあるが、自分の安全について考えられる環境は整ってきている。今後も継続して推進していく。	○「児童生徒の紹介」については、画一された様式を提案する。 ○3年間行われなかった「水泳指導」前の検診について、再確認をしながら、保護者との合意形成を図る。 ○情報共有シートを全員に見てもらえるように職研くんに入れておく。研修で取り上げて事例をもとにディスカッションを通して理解を深めたい。 ○緊急時・災害時の見えてみるブックを用いて訓練を実施し、動き等を各教員が意識できるようにする。 ○特別な日の特別なものとして実践するのではなく、普段の日常生活や学習の中でも考え、実践できるような取り組みをしたい。 ○実際に災害を想定した環境の中で、防災訓練を実施していき、発災後の継続計画についてBOPを根拠とした取り組みの実践を図ってほしい。	○医療的ケアの必要な子どもたちには特に災害時に、登下校の時も電源と水の確保は必要である。学校として引き続き考え整備していきたい。 ○引き続き、個々に応じた丁寧な対応をしてほしい。
	学校情報の積極的な発信 (保護者や関係機関との連携、情報発信) (各学部)	○通信や出席確認等のデジタルによる連絡に必要な技術について校内研修を実施する。 ○オープンスクールを通して、施設や授業の様子等を公開する。	○保護者へのデジタル化による各通信ができる。 ○オープンスクール参加者にアンケートを実施し、80%以上の「良い」という評価を得る。	170/190 A(89%)	○保護者との連絡手段・学部通信の発行のためにGoogle Classroomを使ったり、Google Formを使って校内外のアンケートを作成、集計したりすることをより多くの教員ができるようになった。すべての教員がこれらを利用しやすいよう、使用環境を整えていく必要がある。 ○オープンスクール参加者アンケートでは80%以上の「良い」という評価を得ることができた。今後も実施時期や感染状況を見ながら実施時間を適切に設定し、本校の様子を公開していきたい。	○多くの教員が使えるようになってきたので、ファイルの整理を進めたり、著作権についての知識などを啓蒙したりする必要がある。 ○実施時期や参加者の対象を見直し、より多くの保護者や外部関係者の方の参加を得られるようにする。	○デジタル化については、保護者の側からも連絡がスムーズになるメリットがあった。しかし、アンケート等の返信方法がわからない保護者がいるようなので、丁寧な周知や確認が必要なのではないか。家庭事情によっては、紙での配付も必要だと思ふ。
	一歩進んだセンター的機能の充実	○ケース会議の運営をすすめる。 ○要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園等コンサルテーションを実施する。 ○特別支援教育実践講座の実施(9講座)運営する。 ○伊丹市の巡回相談員として要請に応じて巡回相談を実施する。 ○市内の肢体不自由のある幼児・児童・生徒、肢体不自由学級担任、保護者に対して、進路指導担当者や連携し進路について発信したり、公開授業を実施したりする。	○ケース会議を適切に開催し進める。 ○要請のあった学校園の支援体制に応じて段階的に学校園等コンサルテーションを実施する。 ○特別支援教育実践講座について、多様な受講手段を試行する。 ○他校の巡回相談員と連携しながら適切な対応をする。 ○市内の肢体不自由のある幼児・児童・生徒、肢体不自由学級担任、保護者と継続した関わりができる。	73/80 A(91%) 38/40 A(95%) 40/45 A(88%) 18/20 A(90%)	○日々の連絡帳や電話、学部通信やHP等様々な方法で家庭との情報共有をすることができた。 ○月1回、学部の児童の様子を載せた学部通信と週1回ホームページの更新を行う。 ○1週間1回のホームページの更新や行事を中心とした学校掲示で生徒の学習内容や生活共有することができた。また、連絡帳や電話を通して、さらに具体的に学校生活の様子を伝えることもできた。 ○日々の連絡帳や学部通信、週に一度のホームページなどで情報を共有することができた。 ○ケース会議を開催し今後の課題を校内の部や委員会に引き継ぐことができた。 ○特に特別支援教育コーディネーターの経験が浅い教員が担当となっている学校園については要請校園の実情に合わせてコンサルテーションを実施した。 ○対面開催、オンライン開催、アーカイブ配信を実施し実践講座の希望者のニーズに応えることができた。 ○巡回相談の対象児童の支援について、児童の在籍校を担当する通級指導担当者や連携をとることができた。 ○肢体不自由学級を定期的に訪問し、からの学習について助言したり、今後の活動についての相談に対応したりすることができた。	○来年度も今年度と同様に継続して行ってほしい。 ○ケース会議の内容に関して職員にどの程度周知するべきかを検討する。 ○市内学校園の特別支援教育コーディネーターのニーズを把握できる方法について模索する。 ○実践講座への参加申し込みや受講後のアンケートについてGoogle Formsの活用を試みる。 ○さらなる、連携については巡回相談調整会議を活用して提案をしていく。 ○市教育委員会と連携し、市内の肢体不自由学級との連携を深める。	○市内のセンター校として、2名のセンター教員を配置し、センター的役割の取り組みを積極的に進めている。 ○今後も、市内の特別支援学級の支援を充実させ、本校の取り組みの情報発信も継続してほしい。

(学校関係者評価総括)
○教員が子どもたちと向き合う時間を確保してほしい。また保護者との連携を大切にしながら個々に応じた丁寧な教育を今後も継続してしてほしい。
○社会全体として支援が必要な人は増加しているが、支援する人や財源が不足している。社会全体で、支援が必要な人を見ていくことや、地域の助け合い、ボランティア等が必要である。
○学校のことや学校運営協議会についてもっと多くの人にも知ってもらえる必要がある。SNSの活用は次年度も継続してほしい。

(次年度に向けた重点課題)
○「チーム伊丹特別」の意識の元、全職員が連携協力し、安全安心な学校づくりに努める。
○教員個々の専門性・指導力の向上に取り組む。
○地域のセンター的役割を担うと共に、関係機関や保護者等への情報発信を推進する。

自己評価の基準 A: 目標を上回った(5点) B: 目標どおりに達成できた(4点) C: 目標をやや下回った(2点) D: 目標を大きく下回った(1点)

令和4(2022)年度 学校評価総括表 伊丹市立伊丹特別支援学校

項目	重点項目	具体的施策	達成目標	A	B	C	D	グラフ
学力の向上	適切な実態把握に基づく、自立活動の充実や希望を考慮したカリキュラムマネジメントの推進(教育課程)(自立活動)(研究推進)	○これまでの指導・支援の評価や実態把握を踏まえて、PDCAサイクルで個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成する。	○過去の評価を活かして、個別の教育支援計画や個別の指導計画の目標や手立てを検討し、設定できる。	13	19	0	0	
	(自立活動) ○外部講師の相談を活用し、学部・学校全体で情報を共有して授業にいかす。	○相談員の働き方や過去の相談内容を参照できるようにする。 ○クラスや学部等に対して教育内容を整理し、細かく活用して時間を呼びかけ、学校全体で情報を共有する。 ○相談内容や児童・生徒の状況により、ビデオを使っての相談も可能であることを周知する。	○適切な実態把握に基づいて指導・支援する為に外部講師の相談を活用することができる。 ○相談内容を共有し知識を広げたり、情報をいかしてクラスで実践したりすることができる。	17	18	1	0	
	(研究推進) ○研究チーム(生き方を豊かにする力を育む授業～自立活動)に基づき教科等の系統性(小学部～中学部～高等部)に着目して～に基づき授業づくりを目指し、授業研究に取り組む。	○アセスメントチェックリストの活用について、クラス研や研究全体を通して理解を深める。 ○学部をこえた同じ指導教科グループでの教科研に取り組み、各学部の学習の進捗や授業づくりの悩みを共有する。 ○見えて学ぶ公開授業を実施する。 ○クラス研の中で自分の授業について話題提供し、テーマをもとに話し合う。	○アセスメントチェックリストの内容や発達項目を理解し、実態と照らし合わせチェックすることができる。 ○各教科の指導目標や、目標の解釈の仕方について知り、授業づくりに活かすことができる。 ○題材設定や支援方法について知り、自分の授業づくりに活かす。 ○自分の授業について振り返り、良い点や改善点に気づき、授業づくりのポイントを知り、自分の今後の授業づくりに活かすことができる。	17	21	0	0	
	卒業後の進路や生活を見据え自ら社会に参加する力の育成(キャリア教育)(進路)	○キャリア教育全体計画における児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を踏まえて、教育活動を展開する。	○各授業の目標や活動と関連する資質・能力を年間指導計画に明記することができる。	9	28	0	0	
(進路) ○各関係機関と積極的に情報交換を行い、児童生徒の希望に沿った適切な進路指導、支援を行う。	○各関係機関と連携を深め、進路に関する制度や情報交換を丁寧に行う。 ○保護者に対して福祉合同説明会や進路説明会、見学会、進路だより等を通して適切な情報を提供する。	○本校児童生徒の実態を適切に把握し、各関係機関と連携・協力を深めることができる。 ○毎月進路だより発行やホームページの更新を随時行い、情報発信ができる。	17	20	0	0		
豊かな人間関係の形成はたくましく生きる力の獲得(各学部)	(小学部) ○日々の授業を通して児童の人間関係づくりの基礎を学ばせる。	○学部全体やクラスを超えた学習集団等を適切に編成する。	○それぞれの集団学習の中で、児童が他者と関わる力をつけられるような内容や場面を設定する。	8	8	0	0	
	(中学部) ○人とのふれあいを通し、コミュニケーションの力を相手や思いやる心を育てる。	○校交交流や社会体験学習、日々の授業や学校行事の中で、多くの人と関わり合いを広げる。	○学校の内外の多くの人と関わる機会を設け、生徒自身がコミュニケーション力を発揮し、相手とつながる体験をする。	5	3	0	0	
	(高等部) ○社会や仲間との交流を通して、自分を表現する喜びを知り、コミュニケーションの力を伸ばす。	○日々の学習や校外学習、職場体験学習などの活動で、多くの人と関わりを持つ。	○校外内関わり、多くの人と関わり、自分の気持ちや考えを発信し、他者の考えを知る機会を多く設ける。	4	5	0	0	
	安全・安心な学校づくり(校内保健)(危機管理)	(校内保健) ○部々の状況に応じた記録及び行事に係る健康管理を行う。 ○会議や研修で児童生徒の健康に関する情報共有をし、全職員で共通理解を図る。	(校内保健) ○校内における児童生徒の健康に関する情報共有、学校と医療の連携を図ることができる。 ○職員・保護者に周知し、活用できるように進める。	17	20	1	0	
(危機管理) ○日常生活や学習場面の中に、防災や防災等の要素を含む取り組みを取り入れ、自他の危機管理意識を高める。 ○教職員が自身の取り巻く環境を再確認し、自分自身の安全について再調査を行う。	○日常の授業や学習活動の中で、防災や防災等の要素を含む取り組みを取り入れ、自他の危機管理意識を高める。 ○教職員が自身の取り巻く環境を再確認し、自分自身の安全について再調査を行う。	○日常生活の中に「防災」のエッセンスを織り交ぜ、防災学習を推進していく。 ○「自分自身の環境を整えよう！」を今年度のテーマとして、安全対策等を考慮する。	15	23	0	0		
開かれ信頼される学校	学校情報の積極的な発信(保護者や関係機関との連携)(各学部)	○通信や出席確認等のデジタルによる連絡に必要な技術について校内研修を実施する。 ○オープンスクールを通して、施設や授業の様子を公開する。	○保護者へのデジタル化による各通信ができる。 ○オープンスクール参加率にアンケートを実施し、80%以上の「良い」という評価を得る。	18	20	0	0	
	(小学部) ○積極的に授業の取り組みや児童の様子を家庭に伝える。	○毎日連絡帳でそれぞれの児童の様子を伝える。 ○毎月学部通信を発行し、週1回ホームページも更新して学部の情報を発信する。	○毎日連絡帳に授業や児童の様子を記入する。 ○月1回、学部の児童の様子を載せた学部通信と週1回ホームページの更新を行う。	9	7	0	0	
	(中学部) ○積極的に学校からの情報を発信し、家庭に開かれた学校を目指す。	(医療的ケア) ○「右横の向き方」を見直し、各クラス単位で運用できるようにする。 ○災害時ハンドブック作成をする。	(医療的ケア) ○児童生徒の医療的ケアの情報共有を円滑に行うことができる。 ○教職員・保護者に周知し、活用できるように進める。	6	2	0	0	
	(高等部) ○積極的に授業の取り組み等を発信し、開かれた学校を目指す。	○日々の連絡帳、ホームページの高等部の様子、Google Classroomで配信する学部通信等で、学校における学習内容等を家庭に伝達し、共有する。	○毎日連絡帳に授業の様子等を記入する。 ○月1回部通信の発行と週1回ホームページの更新を行う。	6	3	0	0	